

資料から見る撰集作業

杉本まゆ子

歌集を編む作業は困難を伴う。歌を集め、取捨し、配列を定める。勅撰集ならば最大の配慮をもって行い、私撰集・私家集であっても、楽しみとともに多大な労苦を生み出す。勅撰集は部立に従い、部立内部の配列にも心を配るのが当然である。私撰集の場合は、たとえば『歌枕名寄』のように部立以外にもいろいろな制約を持たせて編纂することがある。個人の歌集である私家集においても、雑纂や単なる編年ではなく、四季恋雑等の部立に分かれているものは多い。意図をもって歌集を編纂する時、どのような作業をするのか、江戸時代前期の歌人烏丸資慶の詠草等の、自筆もしくは近親の手による現物資料（二次資料）を用いて、撰集作業の手掛かりを掴むのが本稿の狙いである。

*

近年まで、歌集を編むという行為は、何度も書き写し、紙を切り継ぎ、内容を吟味して、貼り直し、清書するものであった。一首取捨する度に順序がずれていき切り継ぎが増える。コピー機の導入によって書写回数が減り、コンピュータの導入によって順序の入れ替えが大幅に楽になったが、それまでは、前近代と同じ作業をしていたのだ。だから誰でもこの作業で撰集されることは理屈として知っている。ただ、現在では手

を動かして同様の作業をすることはかなり稀である。それゆえに忘れてしまいうような工程を資料で確認していこうと思う。

*

稿末に、上述の烏丸資慶の家集である『秀葉集（草稿本）』（宮内庁書陵部蔵 四一五・三四六）春部の写真を掲げた。縦二九・七×横四五・二センチ程度の紙を継いだ卷子本一〇巻で、春夏秋冬恋雑羈旅祝釈教連歌の各一巻で構成されている。本文は雁皮紙に書いた歌を切つて天地で貼る。付箋も多い。資慶の詠草をその息光雄が編纂した資料と考えられ、資慶の孫・烏丸光榮編とする奏覧本とは歌順歌数に異同が見られる^①。春部はとくに朱書も多く見られる。

そして、この草稿本作成の前段階となるのが歌稿を集めた資料―和歌書留帳である。日々の詠作を書き留め、手控えを作るのは一般的な作業であり、編年体の家集の基礎資料になるのは言うまでもない。今回写真で掲げた『日安』（高松宮旧蔵ム・一二九）は有栖川宮職仁親王（霊元天皇皇子、一七二三―一六九）の詠歌書留帳である。職仁親王の家集は『其葉集』^②と言ひ、表紙に「改其葉」とあるのはそれに合致する。冒頭は享保七年二月一日阿計丸（幼名）の詠。数え一〇歳の作なので、当時

書き留めたものではないが、編年の資料が残される様子が分かるものである。なお烏丸資慶の場合は息光雄筆とされる『御集第一』以下の書留帳が天理図書館に蔵されている^③。

*

ついで、この書留帳から歌を書き出すのであるが、そのまま書き写したのではなく、題と詠歌事情を記し、ある程度のまとまりを考えながら写したものと思われる。それを題ごとに切り、題に番号を振り、題ごとに寄せて、配列して（時には題に振った番号順を無視して）、一巻の形に貼り付けた。掲出写真の中でも、見えにくいのが、「六十九 夕花」と「七十三 滝上花」（▼）、「七十六 花主」と「七十七 惜花」（▽）は、隣合わせだったことが裁ち跡からわかる。以上の作業を終えて、中書・清書と進むことになる。但し、資慶の家集は奏覧本に至るまでに二転三転するのであるが、それは割愛する。高梨素子氏の御論^④を参照されたい。

*

そして中書である。書式を揃えて書き、重複した題を除き、不都合が無いが見渡すことになる。この時は、やはり見比べるために、冊子よりも卷子や続紙が良いであろう。掲出写真中、●を付した二首は、題が異なるものの「うらやましおしむ（おもふ）かひなくちるはなをあたにちきらぬ風の行末」と「惜しむ」「思ふ」が違うだけの歌である。しかし、この草稿本の段階ではそのまま貼っている。おそらく、中書本の確認作業において、重出ならば切り継ぎをし、必要ならば入れ替えや注記を施すのであろう。（ちなみに、奏覧本では「花随風」題で「おもふ」の形で採られている。）この作業を終えると、決定稿である清書を作ることが可能になる。清書は、卷子でも冊子でも形式を問わない。

以上のように、『秀葉集』草稿本をもとに、撰集の作業工程を考えて

きた。江戸時代の、限られた例がどれだけ普遍性を持つのかは不明である。より多くの例が見つかることを望んでいる。

*

さて、最後に、この手順が汎用性を持つのであれば、鎌倉時代の伏見天皇宸筆広沢切のうちの夏部（書陵部蔵『伏見天皇御集』五〇三・二一九）などにも応用できないだろうか。広沢切は具注暦の紙背を用いたこと、重出歌が多いこと、伏見天皇の筆が速筆であることから、清書ではないことは明らかである。中でも夏部は具注暦一巻の紙背を用いており、構成がはっきりしているにもかかわらず、全一九八首のうち、この卷子本の中での重出歌が一六首もあり問題とされてきた^⑤。

料紙として、製巻された具注暦がそのまま使われているので、完成形に近い（決定稿の下書的な存在）^⑥と思いがちである。しかし具注暦自体、その日に書くことが多ければ紙背に回り、それでも不足の時は切り継いで紙を補い記していくものである。この行為はさほど珍しくはなく、具注暦に補紙を加えた洞院公賢（一二九一―一三六〇）自筆本『園太暦』^⑦が現存する。先の夏部は、切り継ぎを行う行程で止まったものと見てはいかがだろうか。

江戸時代前期から初めて、鎌倉時代の家集の成り立ちの一端に及んだ。『瞿麦』の本文とする平安時代にはまだ遠いが、現物資料からの考察ではこれがやっとである。ご寛恕願いたい。

注

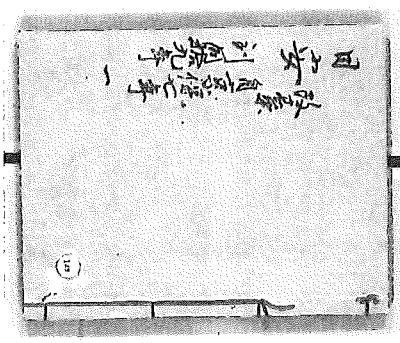
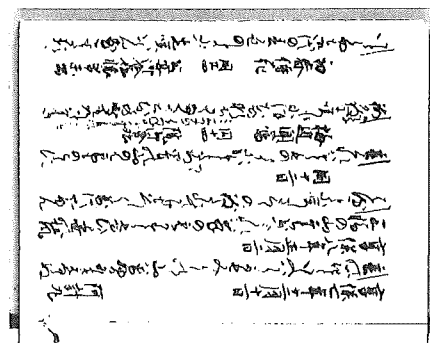
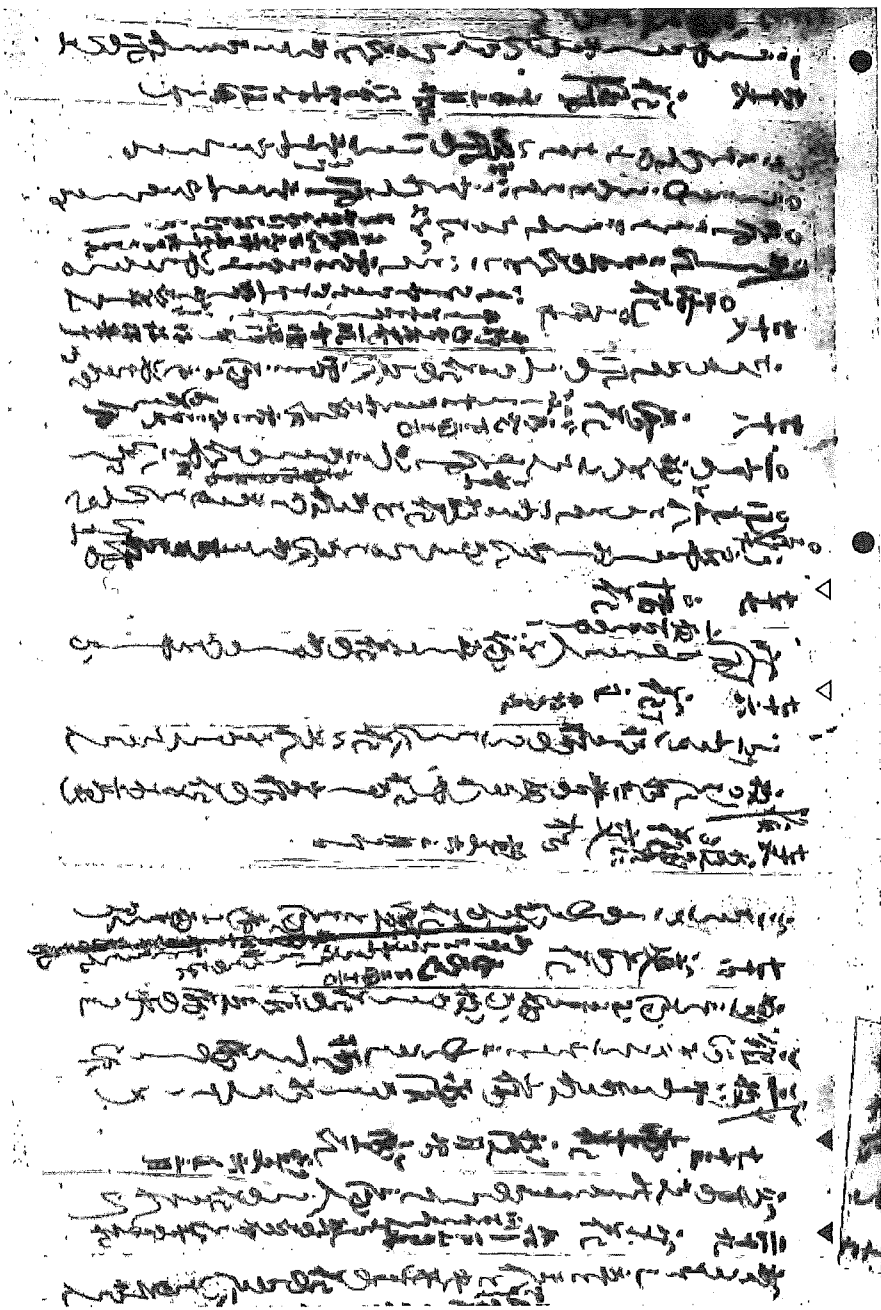
① 高梨素子氏編『烏丸資慶家集』上下（古典文庫、一九九一年七月、二月）解題。

② ①に同じ。

③ ①に同じ。

(4) 伏見天皇御集について、最近の、もっともまとまった研究として、久保木哲夫氏他編『伏見院御集「広沢切」伝本・断簡集成』(笠間書院、二〇一一年)がある。

(5) 京都国立博物館所蔵、重要文化財。☐ 国宝で見ることができる。
<http://www.emuseum.jp/> (二〇一五年九月二七日確認)。



→ 秀葉集 草稿本 (宮内庁書陵部蔵)

→ 高松宮旧蔵『日安』
 一冊目 表紙と冒頭